

An illustration featuring two figures. On the left, a man in a light blue suit stands in profile, looking down. On the right, a woman with brown hair, wearing a yellow and purple long-sleeved shirt and blue pants, is kneeling on the ground with her hands pressed against her forehead in a gesture of distress or despair. The background is plain white with a faint grid pattern.

向日葵の種

舟橋剛二

倒れそう
で倒れぬ
われはや
じろべえ
ほんとう
はもう倒
れたいの
に

ラストスパート

目の見えないはずの盲人ランナーの
その背中までの距離はなかなか縮まらない
そういう僕の左目も失明している
ぼんやりかすむ右目に
盲人ランナーの背中は
ますます存在感を増してゆく
盲人ランナーと伴走者を結ぶ短いロープは
人と人を結ぶ絆を形にしたものだ
一人で走れる僕は一人で走る
でも見えない絆が
目の前の盲人ランナーと伴走者と
僕をつなぐ

いつも息がつまるくらい窮屈だった世界が
無限に広がります
行けない場所などどこにもなかった
盲人と健常者を分けるものもない
ひとりひとりだけがただのランナーとして
同じゴールを目指して走る
いつも闇夜のようなだった世界に
続々と花開く薔薇のようにあふれる光
おそらく目の前の盲人ランナーの
見えない目にも同じ光があふれているはず
ゴールまであと五百メートル
必死な息遣いが
前から後ろから僕を包み込む
苦しいのは僕だけじゃない
もうすぐこの十キロのレースは終わる
レース後の長い道のりも
立ち止まらずに駆けていける気がした

ラストスパート！

沿道からの声援を背に

僕たちはさらにスピードを上げる

気が遠くなるほど長く感じる苦しい時間

かけがえのないまぶしい時間

あと何度僕たちは

こんな時間を経験できることだろう

青い空が赤くなり

何もかもが燃え上がる

立ち止まるな

何も考えるな

目に見えない光が僕たちを照らす

汗が右目に入りもう何も見えない

高まる歓声が僕の脳を痺れさせる

走れ！

走れ！

誰のためでもなく
ただこの瞬間の
血のたぎりのままに

折り返し地点がある詩人ランナーの日常

駆けだした日のことはまだ覚えてるあの日のままの朝焼けを見た

車でしか来たことのない道を走る通り過ぎてきたすべてがいとしい

目の前を誰が走っていきようとも追い越すべきはいつでも自分

痛みとは敵ではなくて友だから悲鳴を聞けばペースを落とす

走りすぎ痛めた膝をかばいつつなお走る人であれこの心

日に焼けるようにこころが青空に染まりはじめる折り返し地点

走るほど苦しくなるが走るほど前へ進んでいるのは確か

流れゆく景色の中でこの胸の鼓動がわれをまだ走らせる

人はなぜ走るのだろういや違うなぜじっとしていられるのだろう

箱根路を走る車も人もなくただわれという風が吹き去る

蹴られても蹴られてもまた受け止めて道よおまえは神であったか

どこから夜道を走るわれを射す光それさえ明日への力

まっすぐに撃て

吐く息のしろさに怯む朝 冬よまどろむわれをまっすぐに撃て

食虫花のごとく口開け人を待つ規則正しき吊革の列

海が見え電車の窓にへばりつく見知らぬ子の目 海より青し

ぼつぼつと雨降りはじめすぐにやみ煮え切らぬわがこころのように

県庁のお堀のあひるは寂しげにわれ知らぬ間に魚を捕るらん

募金箱持つ生徒らを避けてゆくわれは偽善者にもなれぬ者

地下道に迷子の鳩が一羽いて右往左往しやがて去りたり

地下道でいつも寝ていたホームレス今日はいなくて気になっている

空見えぬ場所なればこそ最上の空をこころに描く束の間

空にあるものは儚し　ただそこにわれなきことを慰めとする

コンビニで立ち読みをする青年は二時間前にも見かけた男

休みがちになりたる君に花でなくおでんを買って家に届ける

気がつけば五分遅れていた時計 空回りする君が不在で

泣きもせず笑いもせずにいるけれど人間らしく君は苛立つ

自転車は雨に濡れても気にされず錆びてゆくのみ自転車だから

座り込む君のからだを次々におろかな鳩がすり抜けてゆく

氷雨降り凍える君の足下にいつか土筆つぐしが生えたと信ず

へご自由にをお持ちください〜と札のある詩集 心を病むひと編みき

次々に歌湧き出して閉店せし店舗のひさしの下で書き留む

手取り月八万の臨時職員に心鬼にして仕事を回す

コスト減叫ばれるだろう人間がすべて機械に置き換わるまで

負担増、報酬減の掛け声を鳩の鳴き声聞くように聞く

ハーメルンの笛のような音聞こえる書類の山が片づかぬ夜半

人がみな胸に抱える闇深くなり照明は強まるばかり

残業を続ける男らに混じる白旗上げる寸前のわれ

「お先に」とわれが声かけした彼はいつたいつに何時に帰るのだろう

もう帰る電車はなくて蛾のようにマンガ喫茶のネオンに吸われる

カチカチと音する中を目を閉じるマンガ喫茶のソファーにもたれ

持ち家があってもネットカフェ難民 結局われも中流でなく

休職者ますます増えて戦場と職場は一字違いと気づく

鬱病で休む人こそ正常でわれらが異常なのだ 朝四時

感情をなくせば楽になるだろう　それは逃げ？　逃げたいのかわれは

掃除するおばちゃんたちが楽しげでわれの暗闇なお深くする

何者か分からぬわれは　キリギリス笑ったアリのその後知りたし

結婚し子をなし家も建て替えて線路の続くことを信じて

魔が差して人生棒に振る人のニュース最近増えた気がする

袋小路の袋にすっぽり覆われてこの地球ごと窒息しゆく

鍵っ子であったわが過去 父すでに亡くなり母は寝たきりである

働いて小金を貯めて家を買いまもなく癌に冒されし父

母はただ必死に生きてただけだった　鳴かなくなった蝉のせつなさ

二桁の足し算できて子が見せた笑顔まねする鏡の前で

旅立ちの日は遠からじ子の言葉にはっとすることこの頃多し

何もなきことの尊さ知りわれも実年齢に少し近づく

努力なく平和続くと信じざる妻はまだわが不貞疑う

いつも何か探している妻いつも何かに追われているわれ似たもの同士か

気がつけば肩に降る雪溶けているそれほどの熱をもちて生きたし

トを弾けばトと鳴るピアノ信じられるものまだあると知るために弾く

鍵盤のひとつひとつに神がいて小人のごとくわが十指じゅうし跳ぶ

いつの日かわれにも桜咲くだろう砂時計また引っくり返す

川はただ静かに流れ思い出は宛先のない手紙のように

革命の朝

ここを出せここを出せって叫ぶのは誰だ叶わぬ夢などを見て

ブランコに揺られて食べる昼ごはん気がつけば大人ばかりの公園

閉店の貼り紙ばかり増える街 夢は捨てたら夢ですらない

この国に未来はあるかと言いたげに飢えたカラスがおれを見ている

日付変わるまで残業す楽しみの前の苦難はあえて大きく

日常も過剰過激で過酷なる世相も愛す愛されるため

午前零時回れば駅はひんやりと廃工場の機器のかがやき

次々に貨物列車が通りすぎ人は意思ある貨物に過ぎぬ

数人の無口な客を吸い込んで寝台特急さらに闇へと

巡礼の出発の地の板東に降り立てば雨ささやくように

ドイツ兵俘虜慰霊碑に手を合わせ祈るとき死は目標となる

巡礼の人でにぎわう靈山寺りょうせんじ 仲間連れぬはわれ一人らし

お遍路に関心のなきわれなれど同行二人どうぎょうににんの言葉は愛す

手を合わせおみくじを引き寺を出る祈るこころをまだ秘めたまま

徳島の人をはじめて富士山を見るようにわれ吉野川見る

一人旅いつ以来だろうだが今日もテレビつけたまま眠るのだろう

降り止まぬ雨もよきかな長雨のあとの身軽な雲を思えば

吉野川に沿ってひたすら駆けくだる夢見ることを叶えよ今夜

帰るとはいるべき場所に戻ることだとすればまだ旅の途中か

幾度となく潮時だなと感じつつ結婚生活もう十年目

帰り来て仕事辞めたいという妻の愚痴を聞きつつ夕食を待つ

幸せにしてやれなくてごめんなと君に言えぬまま死ぬのだから

忘れられたかばんの中に亡き父と遊んだ将棋セットの孤独

いつもわざと不利にして結局は勝つ父のやさしさ父のきびしさ

歩一枚なくなり王は淋しそうわれよ旅する歩兵たるべし

歩は成るとと、金になるがわれはわれらしく歩兵のまままで死にたし

気になってひろった小石　引き出しにそんな小石が十二個眠る

遠き日の約束のよう一筋の飛行機雲の軌跡を追えば

何年も前から花が供えられ心清くして過ぎる事故跡

蛙には蛙の未練があるらしく稲刈り終えた田んぼを跳ねる

何もかも気に入らないが結局はいつもと同じシヤンプーを買う

かじられてリンゴはさらにリンゴめくことを頼みにかっかつ生きる

一つくらい涙をためる壺があるはずだとおもう花瓶屋の前

子には子の世界があつてずかずかと踏み込むわれの虫歯がうづく

うちの子はトマト嫌いでゲーム好きおそらく親を愛していない

高く高くボールを空に放り投げ子よ父はまだ夢見ているぞ

気の合わぬ人に会う朝 子の頭しきりに撫でて妻に褒めらる

観覧車くだりはじめて海が見え年取ること悪くはないか

餌のあるときだけ猫は寄ってきて無性に猫になりたい夕べ

闇夜ほど明るい夜はなし星はわれよりつらい誰かを照らし

乗れもせぬ自転車にまた立ち向かう子を見て黙す革命の朝

おれだって虎に生まれたかったさと言ってるはずだ野良猫だって

走っても走っても辿りつけなくて微動だにせぬ蜘蛛を見ている

玄関に脱ぎ捨てられた子の靴をそろえて夜がわれにも来たり

とぼとぼとおろおろとまたうじうじと進むこの道つづけ 死ぬまで

思いがけぬ電話がつづく地中には次々目覚めはじめた蛙

叶わない夢見ることは切なくて切なくてまた夢を見ている

泣くものか叫ぶものかと気負うほどこらえきれなくなり桜咲く

桜咲く尖ってなくてぬるくなく朝五時半の空気が好きだ

張りつめた気持ち春の風が撫で愛は本能ならぬゆえ愛

絶句

六月、母発病

「鬼、鬼」と言いつつおれに塩を撒きけたけた笑う母を見ている

「ひどい目に遭わされたんだ」と言う母に「それはこっち」と言えるわけない

「みんな知ってるんだ」と母は繰り返し見くだすような笑顔をつくる

「鬼、鬼」とおれを呼ぶとき母はまだ自分が鬼であることを知らぬ

長い夜耐える親父に叫ぶ母 誰を殺せば嵐はやむか

ドアノブをがちやがちやさせる音がする ドア一枚を隔てた狂気

父のがんを気遣っていた五時間後「ざまみろ」と母は父に連呼す

「出て行け」とおれは何度もくりかえし「いいよ」と母はひとり呑気に

どんとんと何かをたたく音がする 隣の父母の家の中から

念入りに妻は二重に鍵をかけ誰から誰を守るためにか

呆然と親父は座り込んでいる テレビの中で誰かが笑う

今日治る明日治ると思っても治らぬ母の精神分裂

もし鬼になればこんな悲しみはきつとなくなるだろう おふくろ

母の死を願う気持ちをごしごしと消して今にもやぶける心

借金で失踪中の兄はまた母が治ったころ来るのだろうか

働きづめで来た人生の終点に死よりも深いふかい谷底

狂うとは自然なことだ抑えつけつけつけて太る猛獣がいる

「なぜ」という言葉ばかりにしがみつき母の考えられぬ「これから」

「追い出されようとしてる」と母は言う おれにも居場所なんてないのに

「ならおれも狂ってやる」と叫びたくなった気持ちを抱いたまま 朝

泣いているわけではないが母はもう父に先立たれた顔をして

現実を受け入れられず母はまたコップの中に嵐を起こす

生きるとは闘うことだ狂うまで闘いつづけ死んでゆくのだ

真夜中に紙一杯に「胃癌」の字書き散らかして母はほほえむ

また父は家出している　また母が目を三角につりあげている

「いい薬があるんですよ」と医者は言い選択肢なく二つ返事す

「望むなら入院させてもいい」という医者の誘いにぐらつくころ

胸中に置かれたガラス一枚を隔てて前も後ろも阿修羅

八月、母回復

次の朝、母はけろっとした顔で「おはよう」という おれもそう言う

ふと母は正気にもどる気がつけば父の背中も小さくなった

まだ父は疑心暗鬼な顔をする嵐が去ってもう一ヶ月

冬、死に侵されながら

永遠の夜などないが食べられず徐々に小さくなる父の顔

覚悟して検査結果を聞きに行く父は兵士の顔に戻って

雪の日のがん病棟にクリスマスキャロル誰もが心で歌う

母は

一年の余命と聞いて絶句して饒舌になりました黙り込む

放射能、抗がん剤の副作用軽くてもなお父の焦燥

父の胃の写真に満ちるがん細胞おまえも父とともに死ぬのだ

投げられたさじを拾って拭くように父に漢方薬を勧めめる

青空のような顔して病院に行って曇った顔して帰る

がんに病むからだで父は突き進む死を押しつけて押しつけてゆく

平成十六年五月二日、父逝き母再び発病

病院に色とりどりの花が咲く帰ろうみんないってしまった

海は死に山の緑も死にたえておれのこころに父だけ生きる

「無駄だった」「やるだけやった」会うたびに母の言葉はこころ変わる

貼り紙に

留守のときいたずらしないでくれますか一度じっくり話し合いましょう

母はまた何か探して駆けまわり見つからぬまままた夜となる

父の遺影を逆さまにして笑う母に言葉もなくてただ祈るのみ

二、三ヶ月どこかに行くという母にそのまま死んでしまえと思う

「ホストクラブに行きたい」と言う　はらわたを煮えかえらせて「どうぞ」と答える

蛇口から水のしたたる音がする生きてゆくとはこういうことだ

狂気にはさらなる狂気で迎え撃てそれが無理なら黙って耐えよ

母は今どこにいるのか目の前で母のなりした女が叫ぶ

地上あるべし

照りつける真夏のひかり何もかも溶けゆきてわが夢あらわれる

井の中にいるのは誰か田んぼから遠くはなれたわが家に蛙

わが背よりはるかに高き向日葵の種ひとつまだポケットにあり

今日散りて明日また咲く日々にらにら草そう　　まだ遥かなり明日はわれには

スーツ着る人みな受験生に見え気を取り直しテキスト開く

リクルートスーツを着込む学生の群れに混じれば空さえ見えぬ

一人だが孤独ではない　　孤独だが一人ではない　　試験直前

一分で一問解かねば間に合わぬ試験に人のこころは要らず

朝顔は朝顔らしく朝咲いて告白できぬ人のようなり

粛々と進める業務 採用試験受けたることを胸に秘めつつ

永遠はここにもあそこにもあつて鳴いている蝉死んでいる蝉

運命を受け入れること寝たきりの母にはできてわれにはできず

病院は病人ばかりされどみな妻や夫や子や親である

転職を志すこと言い出せず子の運動会の話のみする

母は子の頭をなでる亡き父がしていたようによくあるように

ランドセル姿見たしという父の生前の声まだあたたかし

口にせぬことばかり増ゆ良き親であるためそして良き子であるため

熊蟬がどんどん増えて油蟬も父の面影も消えてしまった

次々に蟬生まれ出る夏の午後わが頭上にも地上あるべし

台風の風雨に負けず鳴く蝉をあこがれとして記憶する夏

しっぽがえる

子どもと公園に遊びに行く途中
六月ならかならず田んぼをのぞき込む
オタマジャクシやカエルを
見せたり触らせたりするため

ある朝

小さなカエルがはねるのを見つけた
そっと捕まえると
カエルにはしっぽがあった
子どもに見せると
「なに、これ！」
と叫んで黙ってしまった

未知の経験をする と 頭が真っ白になる

それは大人も子どもも同じだ

「カエルになったばかりみたいだな」

「だからまだしっぼが残っているんだね」

そう言うと彼はようやく安心できたようで

その小さな未知の生き物に手を伸ばした

きらきらした宝物を見るように

手の中のカエルに夢中になっている彼に

見えないしっぼがあることを

僕は知っている

「しっぼがえる、ばいばい」

子どもがカエルを田んぼに放す

生えてまもない足で必死にもがくけれど

まだ慣れていないために全然前に進まない

そんなカエルの様子を
子どもは黙って見つづけている

その小さな生き物は君自身でもある
僕は静かに子どもを見ていた
いつかもう少し大きくなったら
この日思ったことを話してやろう

あとがき

アメリカで9・11のテロがあった、平成十三年九月、詩や短歌を書きはじめた。それから十二年。

公私ともにさまざまなことがあった。

平成十七年二月、第一歌集『秘密基地』（北溟社刊）を出版したが、それには収録できなかった家族のを中心に、この作品集を編んでみた。

いつか言おうと思っていた、今まで誰にも言えなかった言葉たち。

彼らを世に出すことができ、今は正直ほっとしている。

私の家族、私の周囲の人々、そしてこの本を目にしているあなたとともに、さらに前へ進んでいきたいと願う。

子を宿すうつわもたねどうたという翼もつものわれも産みたし

平成二十五年三月

舟橋剛二

【ブログ】 <http://blog.ap.teacup.com/hinawarinotane/>

初出一覧

倒れさうで倒れぬわれはやじろべえほんたうはもう倒れたいの
に
第24回国民文化祭・しずおか 2009 短歌 特選

ラストスパート 第22回国民文化祭・とくしま 2007 文芸祭 現代詩 一般の部
第22回国民文化祭徳島県実行委員会会長賞

折り返し地点がある詩人ランナーの日常 『ランナーズ』 2005年4月号掲載

いつの日かわれにも桜咲くだろう砂時計また引っくり返す
第2回書写山円教寺全国短歌大会 (財)姫路市文化振興財団賞

革命の朝 第55回角川短歌賞予選通過作品

絶句 第5回中城ふみ子賞候補作(『短歌研究』2012年8月号に七首掲載)の原型

父の死後長きかづらが這ひまはり古代遺跡のごときわが胸
第31回沼津市芸術祭文芸部門 短歌 芸術祭賞

地上あるべし 歌誌『かりん』2008年5月号(三十周年記念特集号) 三十周年公募作品特集

しっぽがえる 第24回国民文化祭・しずおか 2009 文芸祭 現代詩 一般の部 入選作品